哲學研究　第三百五十四號

アリストテレースに於ける實踐の構造（承前）

——靈魂諸部分の聯關——

安藤孝行

一〇

上述の如く行動の直接的動力因とされた欲求的部分が運動を起す過程は次の如くである。先づ運動には三つの契機がある。第一は動かすもの、第二は之によつて動かすところの手段、第三には動かされるものである。(二九五)この中第一の動かすものには、更に自らは動かぬものと、自らも動き且他を動かすものとがある。動かずして動かすものとは行動の對象としての價値あるものであり、運動の目的因である。人間の行動に於ては右に觀察した欲求對象にして同時に又理性や表象の對象でもあるところの實踐的たるものがそれである。(二九六)次に他を動かすと共に自らも動かされるものは欲求的靈魂部分であり、(二九七)之は動力因である。それは欲求してゐる限り動いてゐるのである。欲求は一種の運動であり、活動である。但しそれは意識内に於ける質的變化として廣義の運動に屬するが、場所的移動としての行動に對して言へば、それ自ら動かされるものではなくして、他を動かす原因である。(二九九)この第一契機たる欲求對象と第二契機たる欲求的靈魂を媒介し、目的因をして動力因を限定せしめるものが感覺、表象、理性の如き認識機能であり、「動物運動論」で言ふところの廣義の理性であることは前述せるところからして明かであらう。また第三に唯動かされてゐる者は有機體としての動物である。そして欲求がそれによつて他を動かす運具となるものは物體としての身體である。(三〇〇)然らば欲求が欲求對象をば理性や表象から與へられることによつて、更にその外的實現の爲に身體を動かすのは如何なる過程を以てであらうか。

先づ欲求は靈魂の機能であるに違ひないが、靈魂は又

肉體の形相であるから、肉體を離れた靈魂の働と言ふものは、先に論じた能動理性の如きものを除外すれば、あるべき筈はない。欲求は多かれ少なかれ肉體と關聯し、必ずや何等かの肉體的變化と相伴ふものである。先に述べた如く感覺機能の中樞は心臟であり、その統一的作用が所謂共通感覺であり、表象も亦之に歸せられた。心理的側面に於て欲求が感覺や表象に制約されるのと並行して、欲求の中樞も亦同じく心臟に求められる。表象や感覺や理性等の把へる形相が感情を伴つて欲求を限定すると言ふことは他面からみれば感官の末梢から來る刺戟が中樞たる心臟に傳達されて之を熱したり冷却したりすることによつて微妙な伸縮活動を生ぜしめこの中樞の微細な變化が末梢に傳達されて四肢や皮膚等に運動や變化を與へんとする傾動に他ならない。欲求は純粋な心理現象として、全く異質的な肉體を動かすのではなく、欲求それ自體が既に肉體的な現象である事によつて行動の原理たりうるのである。斯くして心臟の生理現象こそは營養感覺表象欲求運動の聯鎖的機能の統一の場所である。尤も一口に欲求と言つても、そこには非合理的な欲望もあれば、合理的な願望もあり、中間的な意氣もあるのであつて、之等の肉體に對する關係も自ら相違するに違ひない。概して言へば非合理的な欲求程肉體に近い。最低の欲求は直接的な自己保存と繁殖に制約され、肉體的にしてしかも必須的な欲望であつた。併し乍ら假令願望が合理的欲求として肉體から疎遠であるにしても、尚それが完全に肉體から獨立し得ないことは言ふ迄もない。何とならば靈魂機能は最も純粋で超越的である理論理性の觀想活動に於てさへ、既に何等かの表象を伴ふことなくしては不可能であり、表象を伴ふ限り肉體の制約を脱し得ないからである。況や飽く迄も實踐的な原理である欲求たる以上、如何に合理的な願望と雖も肉體的制約の下にあるべきことは當然である。合理的欲求或は願望が肉體から疎遠であると言ふことは比較的相對的な特徴であつて、その根據は斯る欲求に於ては目的對象が肉體の要求を直接滿足させる如きものではなくして、基底付けられた價値對象たることに存する。即ち斯る對象は單なる肉體の養ひではなくして、所謂善き生活を實現せしめるものである。それは差當り感覺的な快苦を喚起せずして、所謂善惡美醜の感情を以て表象される。欲望の對象は快きものであり願望の對象は善又は美なるものであると言はれる所以である。併し如何に善美なる理想的目的と雖もその實現には必ずや肉體の運動、即ち行動にまたねば

ならない。之が爲には斯る目的表象は兎も角もやはり心臟の伸縮運動を媒介とせねばならない。合理的な表象も亦何等かの意味で快苦の情を通して感覺と欲求の共通の中樞に動きかける。先に述べた如く、善美なるものが單に精神的な價値として獨立することなく、同時に又快きものたるべきことが要求せられ、端的に善きものが又同時に端的に快きものとせられた所以である。(三〇六)思惟や表象が快苦の感情を伴はず欲求を生み得ざる限りそれは肉體を動かす事をえず、從つて又行動することも出來ない。この時肉體はより強力な感情を以て心臟を動かすところの他の欲望に支配される。(三〇七)之が所謂無抑制或は一般に不德者の行爲の生理的說明である。倫理的德とは理性と感性、靈魂と肉體の協同調和の實現に他ならない。善美なるものが單なる精神的價値として孤立するのは理性の無力を現す徵に過ぎない。斯る精神的價値の實現の爲にはそれが肉體的持性(ケイシツ)に迄具體化されねばならない。肉體の精神化は同時に又精神の肉體化である。

この樣に欲求はその目的に於て直接肉體的なるか或は間接的で基底付けられた精神的價値に向ふかの別はあつても凡て表象によつて喚起された感情を通して心臟の生理的變化を體驗し、この體驗を媒介として身體の運動を

生ずるところの動力因である。欲求が行動に於てつとめる役割は動かされて動かす事、對象に觸發される限りに於て自ら一種の運動をなし乍ら、更に身體を道具として具體的な人間を動かす媒介的機能である。欲求はそれが欲求である限り、卽ち欲求的部分のはたらきである限り一種の運動又は活動として現實的形相を現してゐる。しかもそれは斯る現實的形相を基體として、更に進んで外界に作爲せんとする運動の原理を含む動力因である。それは我々の先に明かにした能動的可能に他ならぬ。而も能動的可能は一層發展せる概念としては持性(ケイシツ)として現された。(三〇八)この樣に考へて來ると欲求は之を行動に對して規定すれば一種の持性であると言ふことになる。實際アリストテレースも亦或る箇所に於て之を持性と呼んでゐるのである。(三〇九)但しそれは極めて稀な例であつて、多くの場合持性と言ふ概念は寧ろその根柢に持續する品性として(三一〇)の德や惡德に當てられてゐる。之は勿論持性が比較的恒常的なるに對して欲求が一時的であり、又實踐哲學としての倫理學の關心が品性から欲求又は意思への過程にあつて、欲求から行爲への過程を中心としないことによるものである。我々としては唯存在論的概念としてのヘクシスと、實踐的概念としてのエートスとを區別し、ヘク

シスがデュナミスやエネルゲイアの如く相對的概念なることを注意すればよい。(三一一)見も角この欲求のヘクシス的性格が實踐哲學の基本概念として隨意性(ルクーシア)の概念を限定する。即ち欲求は內面的には或る質的に規定された品性を持つた人格にその端を發し乍ら、對外的には行動と言ふ現實活動の能動的產出的原理となる。この外に向ふ働が內に發すると言ふことが隨意性の本質に他ならない。屢繰返す通り行動の對象は他樣にありうるところの存在である。他樣にありうるとは相反するヘクシスやデュナミスを持つことではなくして、相反するエンデュメノンをもつことである。實在的に斯くある能力と斯くあらざる能力を持つことではなくして、觀念的に斯くありうると共に斯くあらざるをうることである。(三一二)茲に於ては矛盾對立の一項が他項に比して實在的優越性を持たない。自己の中に發動原理を持たぬものが實現する爲には他者にまつ他はない。この他樣たりうる存在に限定を與へるものは必ずしも人間であるとは限らない。それはまた自然其他のものでもありうる。(三一三)併し人間も亦他の動物や植物と共に決定の原理を持ちうるのであつて、この原理が意識的な行動主體に內在する時、行動は隨意的であると言はれる。(三一四)凡そ生成する現象の原因は自然によることもあり必然性によることもあり、偶然によることもあるが、之等は何れも行動主體の責任の外にある。唯原因が主體に內在すること、即ち我々に依存する現象のみが、我々自身の行動として責任を問はれうるものであつて、賞讃や非難の的となるものである。人間の德とか惡德といふものも正にこの樣な領域にのみ成立する。(三一六)要するに隨意性とは行動の自由であつて、一切の道德的價値判斷の根本原理なのである。それでは我々の行動は一切隨意的であらうか。或は隨意的ではなくして、而も何等かの意味で我々の行動であるものが認められるであらうか。

(三一五)

この問題に對してエウデーモス倫理學は眞正面から隨意性の積極的徵表を求めようとしてゐるが、ニコマコス倫理學では寧ろ不隨意性を先に規定することによつて、その反對概念たる隨意性を明かにすると言ふ消極的な道をとつてゐる。エウデーモス倫理學は先づ隨意性の徵表を欲求と意思と理知の何れかに求めようとする。欲求には願望と意氣と欲望の三種が分たれ、その何れに發する行動も隨意的である如くであるが、何れか一を以て特に隨意性の本質としようとすれば異質的な欲求が對立抗爭する場合に於て、隨意的なると共に不隨意的であると云ふ矛盾に陷る。そこで意思を以て隨意性の本質にしよう

と企てれば隨意的であると認められる願望に發する行爲が必ずしも意思の如く熟慮をまたないで生じうると言ふ不都合が起る。斯くの如くして若し欲求や意思が隨意性の本質たるに足りないとすれば殘るところは理知がそれであるといふ事とならう。斯くの如き理知とは行動の個別的狀況、例へばその對象、手段、目的等に關する認識であるとされる。(三一七)併しアリストテレースは茲で右の難問を反省して欲求や意思が隨意性の本質でない樣な觀を與へたのは、我々が之等の中の或る一つの種を以て特に隨意性を獨占せしめんとしたことにあることを指摘する。即ち無生物に於ては運動の原理は唯內なるか外なるかの何れかであり、前者ならば或る意味で自由であり、後者ならば强制されるのであるし、動物となると內的原理は單なる本性に止まらず欲望となるのであるが、しかも彼等は自己の內部に於て欲望と理性との對立を持たないのであるから構造的に無生物に近い。しかるに人間に於ては然らずして欲望や意氣の如き無理的欲求と願望や意思の如き有理的欲求との對立が現れ、しかも之等は何れも人間の本質に屬するものであつて、決して一を以て內、他を以て外となすことが出來ない。隨て先に試みた如く、之等の中の一種を基準にして論ずるならば欲望に隨ふ限り隨意的な樣であつても願望に反する限り不隨意的なるかの如きディレンマに陷らざるをえない。しかし之等が凡て人間の本質である以上、隨意性の問題は人間全體を基準として論じなければならない。そしてその限りに於ては如何なる欲求如何なる意思に發する行動と雖もひとしく人間の隨意的行動であるとなすべきである。(三一八)ニコマコス倫理學に於ても自己の善行のみを隨意的であるとして賞讃を要求しつゝ、醜行は欲望に强制された不隨意行爲であるとして非難を回避せんとする强弁に對して、我々の欲求に發する行爲は一樣に隨意的であり、隨て前者が隨意ならば後者も亦隨意的なるべきことを繰返し强調してゐる。(三一九)もともと人間をも含めて一般に動物といふものは動かされて動かすところの媒介者であり、行動の動力因に過ぎない。動物の作り出す運動は唯場所的運動のみであり、しかも之は環境から蒙る他の運動を原因とするものである。(三二〇)唯外界の刺戟は或は先づ理知や欲求を動かして、之を通してその動物の身體を動かすこともあり、或は然らずして例へば睡眠時に於ける如く直接身體に影響して知覺や欲求を通さずに身體の運動を生ぜしめることもある。(三二一)この環境の力の支配が間接的である場合が動物の隨意的行動の生ずる時であり、直接的なる場合

は所謂非隨意的運動である。而も前述の如くその欲求が合理的形式をとるか非合理的形式をとるかと言ふことは隨意性に關する限り無關係である。人は往々下等な欲望に隨ふ時、快樂が自分を强制したと言ふが、併し强制は苦痛を併ふものに限るのであつて、快樂は寧ろ人間の行動一般の動力である。前述の如く高等な願望と雖も一種の快感と結合せずには現實的となりえない。人間は單なる理性者でもなければ、單なる感性者でもない。しかも彼は同時にこの兩者の統一體である。隨つて彼の意識的な欲求に發する凡ゆる高等な、又下等な行動は均しく彼の隨意性によるものである。感性的快樂の追求たると道德的善の追求たるとは問ふところではない。隨意性とは環境の力が欲求を媒介として行動に實現する過程に成立するのであつて、欲求の定立とかその實現過程の理知的活動とは無關係である。畢竟隨意性とは行動の原理が行動者に內在すること、卽ち一般に欲求の實現を意味する。

前述の如くニコマコス倫理學は隨意性をば裏から規定して、不隨意性の第一の契機を外力による强制としてゐる。强制とは行動の起源が全く外的な原因にして、行動主體の能動的作爲が全然加はらないものであり、例へば暴風が船を吹き流して、豫期したかつた土地へ漂着せしめる如き場合である。(三二三) 斯かる場合には、行爲者の欲求は實際上生起した事件の原因ではない。それは欲求に對して全く偶然的な出來事である。欲求は動力因として身體又はその延長たる道具を動かす事によつて、外界にある作爲をなす限り隨意的と言はれるが、(三二四) 右の如き場合には欲求の內容は實現されず、その能動性は何らの効果をも生んでゐない。併しそれは行動者が全く關與せぬ現象を凡て不隨意的となすものではない。例へば單なる自然現象は單にそれのみで見られる限り、不隨意的ではない。純粹に外部的な自然現象は言ふ迄もなく、假令自己の身體の生理現象であらうともこの事に變りはない。(三二五) 不隨意性は本來觀念的には、或は寧ろ統計的可能性の意味に於ては人間のなしうる事にして、而も人間の有する實在的可能性としての欲求が實現を阻まれ、外的自然力が欲求に反する如き結果を生じた場合に限つて認められる。强制による現象が苦痛を伴ひ隨意性による行動が快感を伴ふのはこの故に他ならない。(三二六) 隨意性とは欲求一般の滿足であり、强制による不隨意とはその否定である。卽ち不隨意性とは一種の消極的價値概念である。欲求の缺如ではなくしてその否定であり、阻害なのである。(三二七)

強制とは物的な力が人間の有意的行動を否定することであつて、之が不隨意の原理となるのであるが、この物的な力の強制に類するものに、心理的強要がある。それは例へば權力者が重大な害惡を以て脅迫して、本來ならば行爲者の欲求するところでない事柄を強ひて行はせる場合とか、非常危急の際に當つて、この危急をまぬがれる爲に平時尊重する財貨を放棄する如き場合である。この樣な行爲が隨意的であるか不隨意的であるかと言ふことは問題の存するところで、アリストテレースは斯かる心理的強要による行爲をば、不隨意と隨意との混合であるが、その本質部分は隨意的であると決定してゐる。何故ならば、その行爲はそれの爲される刻下に於て、一切の具體的條件のもとに觀る限り隨意的であるからである。強要がなければ、それ自身では望ましからぬ事柄でも、之を拒否することによつて生ずる害惡との比量によつて、その方がより小さな害惡であり、耐え易き苦痛であるならば、忍んで之に隨はうとする限り、そこには行爲者の自發性が認められるのである。斯る行爲に於ても彼の器官を動かす端初は彼の中にあり、彼はその限りに於てそれを爲すことも爲さぬことも思ひのまゝになる。それ故斯る行爲は隨意的である。但し端的に言へば恐らく不隨意的である。何故ならば何人もその樣な行爲そのものをなさうとは思はないからである。（三二八）

強要に就てのこの解釋は、隨意性が元來欲求の起源に認められるものではなくして、欲求から行動への實現過程に成立することを裏書する。如何なる強要又は誘惑を以て生じた欲求であつても、それが欲求である限り、主體の行動の自發的な原理たることを失はない。隨つて欲求の起源によつては、行動の自發性は變化を蒙らない。

併し乍ら強要に基く行動が端的に言へば隨意的でないと言ふ事は、隨意性を特殊の欲求の屬性とすることにはならないであらうか。この事は果して強要されずして生ずる欲求が隨意的欲求であり、強要されて生ずる欲求が不隨意的な欲求であることを意味するであらうか。否寧ろこの場合にあつても、隨意と不隨意は欲求の起源による種別ではなくして、行動の種別であると解すべきであらう。それ自體望ましからぬ事態、卽ちより大きな害惡によつて強要されない限り、之に對する欲求の生じえぬ樣な事態が端的に言へば不隨意的であるとは、その樣な事態を欲する欲求が不隨意だと言ふのではない。隨意性と言ふことは欲求に發する行動の特性に他ならぬから、欲求が不隨意的であるといふことは意味を持たない。そ

れは畢竟欲せずして欲すると言ふ矛盾にすぎない。欲せずして爲すことはあつても、欲せずして欲すると云ふ樣なことはありえない。強要による行爲が端的に不隨意的であるとは、抑その樣な欲求とか、その樣な欲求を生ずべき具體的環境を全然度外視して、欲求とは離れて獨立的な事態、行動の事實のみを觀察し、この事態が抽象的な事態として見られる限り決して欲求されないと言ふ事にすぎない。その樣な欲求が生じえないから、隨てかゝる行爲は不隨意的となるのである。強要による行爲が不隨意的とみられるのは抽象的見地からしてである。端的にとは絶對的にとも抽象的にとも譯しうる概念である。如何なる行爲でも之をその原因としての欲求に關係させてみれば、その欲求の原因、動機が何であらうとも、その行爲は隨意的と解される。抽象的には欲せられない事柄も具體的な狀勢の下にあつては相對的比較的によきものとして欲求されることが可能であり、隨てその樣な比量的欲求に發する行動は尙依然として隨意的たることを失はない。

要するに隨意性の第一の契機は欲求一般であつて、その欲求の質的限定に無關係である。如何なる事情のもと、如何なる理由と形式によつて生起する欲求であつても、その阻害されざる實現はひとしく隨意的と言ひうる。目的の道德的意味の反省とか、手段の探究と言ふ樣な理性的契機は隨意性の中には含まれない。願望や意思はもとより一種の隨意性であるが、しかも隨意性の中には全く無理的な欲望に發する行動も含まれるのであつて、それ故にこそ之は成人のみならず子供にも認められ、人間に限らず動物にも認められるのである。（未完）

二九五　De An. Γ. 10. 433 b 13.

二九六　Met. Λ. 7. 1072 a 23. 「とある事からして第一天界は永遠的なものであることになる。かくてまたそれを動かす何ものかも存在するのである。しかも動かされもするし、動かしもするものは中間的なものであるから、動かされることなくして動かすところの永遠的なる實體にして且現實態である何ものかが存在する。欲求されるものや思惟されるものは、この樣にして動かすのであつて、動かされずして動かすのである。それらの中の第一なるもの（最初に思惟されるものと最初に欲求されるものは同一のものである。蓋し眞くみえるものは欲望されるものであり、眞くあるものは願望されるものである。しかも我々は或るものを欲求するが故に、眞しと考へるのではなく、むしろ眞しと考へるが故にそれを欲求するのである。即ち思惟が始である。理性は思惟されるものによつて動かされるのであり、（反對對立の）一方の系列はそれ自身によつて思惟されるも

のである。」Teichmüller (Op Cit. 207) が不動の動因は廣義の實踐理性で言ふのは當らない。實踐理性は欲求能力と共に一種の動力因、即ち動かされて動かすものである。それは不動の目的因たる對象即ち善きものを意識にもたらす第一の媒介者である。Teichmüller の誤解はアリストテレースが心理學のこの場所に於て運動の第二契機として單に欲求的部分のみを掲げてゐるところに由來するものであらう。併し一層精密にその聯鎖を辿れば我々が本文で述べた如く、この第一第二の兩契機の間に認識的靈魂が媒介者として介在するのである。

二九七　De An. Γ. 10. 433 b 16. Motu. An. 6. 701 a 1. 10. 703 a 5.

二九八　De An. A. 4. 408 b 16. Γ. 10. 433 b 17. συνέβαιν γὰρ τὸ κινούμενον καὶ ἡ ὄρεξις κινήσαι τὴν ἐνεργείᾳ by Hicks. この原文とその解釋には多くの異說がある。詳しくはヒックスの同所への註釋參照。この運動と言ふのが場所的運動ととるべきか運動一般と取るべきかに就ては後說をとる。欲求それ自身はプルタルクの解する如く心理的活動であつて場所的運動ではない。

二九九　Phys (e). 2. 253a 12.

三〇〇　De An. Γ. 10. 433 b 18. Cf. Gen An. B. 6. 742 a 22.

三〇一　「アリストテレースに於ける靈魂の構造」哲學研究三二〇、三二一、三二四、三二六號

三〇二　Phys. (e). 2. 253 a 17. De An, A. 1. 403 a 6.「多くの場合に於て、例へば怒り、勇み、欲し、總じてものを感ずる如きは（靈魂が）肉體なしには働を受けたり、働をおこすことはない樣にみえる。唯思惟することのみは最も靈魂に固有な樣である。併し若し之も亦一種の表象であるか、或は表象なくしてはありえないとすれば、之も肉體なくしてはありえないことにならう。してみれば若し靈魂の働き又はその受働の中、何か靈魂に固有のものがあれば、靈魂は肉體を離れてありうることにならうが、若しそれに固有なものがないならば、靈魂は可分離的ではないであらう。むしろ靈魂は恰も眞直である限りに於ける眞直なものに似てゐる。それには多くのものが附帶してゐる。例へばそれは眞鍮の球と一點に於て接する。けれどもその眞直なものは獨立してそれのみではこの樣な接觸をしないのである。實際眞直であることは常に或る物と共にあるのだから不可分なのである。そして魂靈の狀態も亦凡て肉體と共にある樣にみえる。即ち憤怒とか穩和とか恐怖とか憐憫とか勇氣とか倘又歡喜や愛することや憎むことの如きである。といふのは之等と同時に肉體も亦或る變容をうけるからである。……若し斯くの如くであるなら、靈魂の情態は材料をもつた概念（ロゴス）であることは明かである。從つて之等のものの定義は、例へば怒るとは一定の身體の又はその或る部分とか能力とかの一定の原因による一定の目的の爲の動きの一種であると云ふ如くである。そしてこの事の故に自然學

者も既に靈魂に就て或は一般に或はこの様なものに就て觀想すべきである。併し自然學者と辯證論者とでは之等のそれぞれ、例へば怒とは何であるかを異つた仕方で定義するであらう。辯證論者はこの様なものを仕返しに相手を苦しめようとする欲求とか、又は何かそのやうなものとして、自然學者はそれを心臟の周邊にある血液即ち溫き物の沸騰として定義するであらう。之等の中後者はそれを質料を以て說明するのに、前者はその形相即ち概念を以てするのである。何故ならば概念は事物の形相だからであり、このものは若し存在するならば必ずや一定の質料の中になければならぬからである。それでは之等の人々の中何れが(眞の)自然學者であらうか……。むしろ自然學者とは一定の物體とその一定の性質の質料との働きとその蒙る變容との凡てを取扱ふものなのである。

Motu An. 7. 701 b 13 「動物に於ては同一の部分が熱によつてそれらの部分が膨脹し冷きによつて収縮又は變形してより大きくなつたり、より小さくなつたり、その形を變化することが出來る。そして表象や知覺や觀念が變化させるのである。即ち知覺は直ちに一種の變化に屬するが、表象や思惟も事物に屬する能力を持つてゐる。即ち或る仕方で思惟される形相は熱きものの形相でも冷きものの形相でも、快きものでも、怖しきものでもそれらの各の事物があると同じ樣である。それ故唯思惟する丈で慄えたり恐れたりするのである。そして之等は凡て情緒(パトス)であり變化である。そして身體に於て變化して、或ものはより大きくなり或るものはより小さくなる。そして根源に於て一寸變化すると、周邊に於ては多大の相違を生ずることは明かである。丁度舵を極僅かずらすと船首の多くの變位が生ずる如くである。また熱や冷に關して或はこの樣な何か他の狀態に關しても、心臟の周邊に變化が生ずると、その中では大きに關しては知覺出來ぬ程の小部分であつても、身體の多くの相違を生ずる。例へば赤面したり、蒼白になつたり、鳥肌になつたり、慄えたり又は之等が反對の現象を生ずる。

前述の如く行爲に於ける運動の端初は追求や回避の對象である。そしてそれらの思惟や表象には熱や冷が必然的に隨伴する。即ち苦しきものは避くべく、快きものは追求すべきものである。(但し小さい部分にこの事の起るのを看過する)併し苦しきものや快きものは凡て恐らく冷や熱を伴ふのであつて、之は感情からして明かである。即ち畏敬や恐怖や色や事その他の肉體的な苦しき事又は快き事は或ものは部分的に、或ものは全身的に熱や冷を伴つてゐる。また記憶や期待はいはゞ之等のものの心像を用ひて多かれ少なかれ之等のものの原因である:。即ち有機的部分は感情によつて適當に整へられ、感情は欲求により、又欲求は表象によつて整へられる。そして表象は思惟によつて或は知覺によつて生ずるのである。」

Motu. An. 11. 703 26-36. 「運動が末梢(モリセン)(部分)からし

て中樞（根源）にゆき中樞からして末梢にゆき、かくして相互に他に達するのは合理的に出來てゐる。即ちAを中樞と考へようすると我々が先に書いた圖形のアルファベットの各個から諸の運動が中樞に達する。すると動かされ、變化せられた中樞から運動が發する。（即ち中樞は可能的に多くのものであるから）

B（から刺戟を受けて變つた）中樞はBへ、CのはCへ、雙方からのは雙方へ行く、即ちBからのがCへ行く、しかしBのから中樞Aへ向ひ、中樞AからCへと行くのである。

三〇四　Part. An. B. 1. 647 a 23-31. Γ. 4, 666 b 15

三〇五　De An. A. 1, 403 a 9. Γ 7. 431 a 16. 8. 432 a 8. a 13, De Memor. I. 449 b 31. De Sensu. 6. 445 b 16.

三〇六　E. E. H. 2. 1235 b 32, 1236 b 26, 1237 a 27.

三〇七　E. N. Θ. 4. 1156 b 22, 15. M. M. B. II. 1209 a 7. b 32.

三〇八　前掲「可能概念の諸相」三、哲學研究三〇〇號

三〇九　Pol. H. 15. 1334 b 17.「次に憲魂と肉體は二つであるから、憲魂にも二つの部分があり、一は無理的であり今一つは有理的である。そして之等の部分のヘクシスは數に於て二つであり、その一は欲求他の一は理性である。」

三一〇　Eut. 8. 8 b 29. E. N. B 4 E. E. B. 2. M. M. Γ. 7. Phys. H 3. 246 a 12 3.0. Pol. A. 13. 1259 b 25 E, 6 1265 a 35. Rh. A. 6, 1362 b 13. E. 12. 1388 b 34. Γ. 7. 1408 a 29. E. N. B. 6. 1106 b 36. Z. 4. 1140 a 4.

E. N. B. 4. では憲魂の樣相を分つて受動（パトス）（情意）、能力（デュナミス）習性（ハクシス）となし、欲望や怒の如きは受動に、德や惡德は習性に歸せられてゐる。一時的現實的な感情や意欲が受動的であるのに對して、德とか惡德と云ふ性格がそれ自らは可能的であり乍ら一層自發的個性的であることを物語るものである。

三一一　前掲「可能概念の諸相」哲學研究三〇〇號二三八頁以下參照。

三一二　同上二一五頁以下參照。

三一三　E. E. B. 10. 1226 a 25,「或るものは存在することも存在せざることも可能であるが、その生成は我々に依存せず、或は自然により或はその他の原因によつて生ずる。」

三一四　E. E. B. 6. 1223 a 1「必然的なるものより生ずるものは必然的である。しかし他樣たりうるものから生ずるものは反對になることもありうる。そして人間自身に依存するものはこの樣なものに屬する多くのものである。そして人間自身はこの樣なものの原理である。かくして人間がそれの原理であり支配者であるところの諸行爲は起ることも起らざることもありうる。そしてこのものが生じたり、生じなかつたりするのは彼に依存する。そしてなし、（ポイエイン）又はなさぬことが彼に依存することからは彼が之等の原因である。そしてそれの原因である限りのものは彼に依存する。

三一五 Part. An. A. I. 639 b 20-640 a 12. 642 a 1-13. 30 -b 2.

三一六 E. E. B. 6. 1223 a 10-20.

三一七 E. E. Bg. 1225 b 2.

三一八 Ibid. 7. 1223 a 21 ff.

三一九 E. N. Γ. 3 1111 a 22-b 3. I. 1110 b 9-17.

三二〇 Phys. Θ. 2. 252 b 17. 「しかしこの様なことは靈魂を持つた存在に就て何ものにも勝つてはるかに明瞭である。即ち時として我々の中には如何なる運動もなくて、我々はそれ迄靜止して居乍らそれにも拘らず、時には動くことがある。そして外部からは何ものも動かさないでも時としては我々の内に我々の外部の運動の原理が發生することがある。即ちこの事は靈魂なき存在に就ては同様には見かけないのであつて、常に外部から何か他のものが、それを動かすのである。しかるに我々は動物が自己自身を動かすと言ふ。かくして若しそれが時に全く靜止して居るならば不動の存在の中に外からではなくして、自己から運動が生ずるといふことにならう。さて動物に於てこの事が起るとすれば、同じことが凡てに關して起ることを何が妨げようか。蓋し小宇宙に於て起るならば大宇宙に於ても起るのである。そして若し宇宙に於て起るならば、又無限に於ても起る。無限が全體動き又は靜止することが出來るならばである。」

Ibid. 253 a 7. 「第三のものは最も難問を持つと思はれる。即ちそれ以前に運動を中に持つてゐないのに運動の生ずると云ふことで、それは靈魂を持つた存在に就て起るとされる。即ち前には靜止して居乍ら一般に考へられるところでは外部から何ものも動かさずに、その後で歩行するのである。併し之は誤である。何故ならば我々は常に動物の中に於て、組織（シュムピトーン）づけられたものの或るものが動くのを見る。そして動物自身は之の原因ではなく、恐らくその環境が原因である。しかし我々は凡ゆる運動をば自分で自分を動すと言ふのではなく、唯場所に關してである。それ故我々は次の様に云つて差支ないし、否それどころかさう云はねばならぬのである。即ち多くの運動が體に對して環境から生じそして之等の中の或るものは理知又は欲求を動かし、また前者は既に動物全體を動かすのであつて、それは睡つてゐる者に起ることである。即ち何等感覺的運動が内在することなく、しかも或る種の運動が内在して、動物がまた醒ますのである。」

Phys. Θ. 6. 259 b. 1. 「そして我々は明かにそれ自らを動かす如きもののあることを看取する。例へば魂を持つたものとか、動物の類である。この事は次の様な意見を提供する。即ち我々はこの様なものの中にこの事が生ずるのをみるから、全然運動がなかつたにも拘らず運動が生ずると云ふことがやはり可能ではないかどうか。即ち或る時に動かなかつたものがまた動くと一般には考へられてゐるのである。ところで我々は之等のものが唯一種の運動をするの

であり、しかもそれは嚴密な意味に於て（初めて動くの）ではないと言ふことを把握せねばならぬ。何故ならば、その原因はそれから出るのではなく、他の自然的運動が動物の中にあるのであつて、それは自らによつて動かされるのではない。例へば成長や衰弱や呼吸の如きである。之等のものはそれぞれの動物が靜止して居て、自分からする運動をして居ないのに動かされるのである。之の原因は環境や動物の中へ入つて來る多くのもの例へば屢食物である。即ちそれが消化されると眠り、またそれが分けられると醒めて、自分自身を動かすがその運動の最初の原理は外部から來るものである。それ故彼等はいつでも連續して自分から動いてゐるのではない。即ち他のものがそのものを動かし、そのものはまた動かされて、それ自らを動かす個々のものに關係して變化するのである。」

三二一　Phys. Θ 2. 253 a 11-21.

三二二　Met. Δ5. 1015 a 26.「更に必然（アナンカイオン）とは强制的（ビアイオン）なものや强制（ビア）を言ふ。それは衝動や意思に反してそれを阻み妨げるところのものである。即ち强制的なものが必然的であると言はれる。それ故に又苦痛的である。丁度エウエーノスが「蓋し必然的な事柄は固より凡ていとはじと言ふ如く。そして强制は或る必然である。丁度ソフオクレースも「しかも力が我々にこの事をなすのを必然的ならしめる」と言ふ如く。また必然性は或る說得しがたいものであると思はれるが、それは正しい。何故ならば意思や勘考に隨てする運動に反するものだからである。」茲でも ἀνάγκη と βία の區別はない。」Rh. A 11. 1370 a 10.

三二三　E. N. T 1. 1109 b 35.「强制によつて生ずるもの、又は無知によつて生ずるものは不隨意的であると考へられる。原理が外的なものは强制的である。この樣なものは行爲するものや情意する人の與る餘地の全然無い樣な性質のものである場合、例へば風が或は支配的な力をもつ人が何處かへ伴れて行く如きである。」1110 b 15「强制的な行爲とは、かくしてそれの原理が外から來り。强制された人は少しも之に關與してゐないところの行爲のやうである。

三二四　E. N. T 1. 1110 a 16.

三二五　E. N. E8. 1135a 31「かくて知らざる故のことから、或は知らざる故ではないが、自分の勝手にならぬ故の事柄或は强制による事柄は不隨意的である。蓋し自然的に我々に屬してゐても多くは我々は知りつゝ行爲し、又受動情意するのであるが、それらは隨意的でもなければ不隨意的でもない。例へば老人になるとか死んでゆくとかの如きである。」

三二六　前揭「可能概念の諸相」哲學研究三〇〇號三三一頁參照。

三二七　E. E. B 8. 1224 a 30-b 1. 1. 1110 b 11-15.

三二八　E. N. T 1. 1110 a 4-18. ニコマコス倫理學では强制（ビア）と强要（アナンケー）とを區別して論じてゐるが、エウデーモス倫理學にはその區別が明かにされてゐない。外力は一樣に强制

又は强要の原理である。併し强制又は强要の物理的と心理的といふ樣式の別は認めてゐる。そして之に對する解決は結局强要の强度の程度的な差異に歸してゐる。隨てそこでは原理的絕對的な解決は與へられてゐない譯である。 E. E. B 8. 1235 a 1-34. 參照。

前號目次

倫理學の現代的使命……文學博士 島 芳夫
確實性……文學士 長澤信壽
—聖アウグステイーヌス研究・その一—
アリストテレースに於ける實踐の構造(承前)：
—靈魂諸部分の聯關—
文學士 安藤孝行